

令和6年度 一ノ宮小学校 校内研修計画

I 研究主題及び教科

研究主題	思いや考えを聴き合い，学びとつながりを深める子どもの育成 ～対話（聴き合い）によって学びが深まる授業づくり～
教科・領域	国語科・算数科

II 主題設定の理由

本校の研究主題の土台には、「差別に気づき，差別をしない・させない子どもの育成」を位置づけている。これは，何年にもわたっての本校の研究主題であり，人権に満ち溢れた社会をつくっていく子どもの育成は，本校がこれまでずっと大切にしてきたことである。本校には，外国につながるのある児童や障がいのある児童，経済的に厳しい家庭の児童など，教育的に不利な環境のもとにある子どもが多く在籍している。部落問題をはじめ，いじめや不登校など，様々な人権課題を解決するまでは，人権教育を蔑ろにすることはできず，研修を進めるにあたっての揺るぎない土台であると考えている。

しかし，こういった子どもたちをはじめ，目の前の子どもたち一人一人の自己実現のため，学力を保障していくことも，疎かにはできない。全国学力・学習状況調査の結果からも，CD層の児童の割合がとても高いことが明らかであり，問題が後半になるにつれて，無回答率が高くなっていくなど，粘り強く取り組む姿勢にも課題があることが分かっている。「一人の子どもも独りにしない授業づくり」に取り組み，学力の確実な定着を図ることを目指していかなければならない。

また，本校の児童はとても人懐っこく，自分のことを聞いてほしい，見てほしいという思いが強いように感じるが，うまく自己を表現できなかつたり，周りの児童に受け入れる（聴き入れる）態度が育っていなかったりする姿が見られる。授業の中でも，自分の考えを分かりやすく伝えたり，友達の考えと比べてまとめて話したりするなど，学びが深まるような話し合いを行っていくことが十分ではない。また，自分たちで課題を見つけたり，課題解決に向けて取り組んだりする力も弱いように感じる。問いや課題に対して受け身的な児童が多く，そもそも自分の考えをもつことができなかったり，話すことができる一部の児童の考えに流されてしまったりすることも多い。

そこで，令和4年度から，研究主題を「思いや考えを聴き合い，学びとつながりを深める子どもの育成」とし，教科研修として，「対話によって学びが深まる授業づくり」を，国語科を窓口として行った。国語力はすべての教科の基本となるものであり，その充実を図ることが学力向上には重要であると考えたのである。子どもたちが自らを表現し，「対話」することを実現するためには，子どもが「友だちの考えや思いを聴きたい（知りたい）」「自分の考えを表現したい」という主体性と，考えを表現しやすい場が必要である。また，物語を読むことは，もともとは一人で行うことだが，仲間と読み合うことで，様々な解釈と出会い，物語の世界をもっと豊かに，そして広く味わうことができるとも考える。また今年度からは，窓口を国語科だけでなく算数科にも広げ，ペアやグループ解決を取り入れることで，疑問を自由に質問したり，一人一人が考えを伝えたりしながら，互いに考

えを交流し合い、主体的に理解しようという意識が高まると考えた。「しんどい子」たちをも巻き込み、「聴きたい」「伝えたい」という子どもたちの欲求を引き出せるような授業づくりをしていこうと考えた。また、どの教科においても「聴く」力をつけていくことに重きをおいていく。

昨年度までの実践から、ペアやグループで聴き合う活動を取り入れていくことは、全ての子どもたちの学びを保障していくことにつながることを実感できた。取組は、学校全体で方向がそろわなければ目指す目標は達成できない。今年度も、「対話する（聴き合う）」とはどのような姿を指すのかをより明確にし、全教員で「子ども同士の聴き合い」を大切にした授業づくりを目指していきたい。そのためにも、ペア・グループでの対話の目的を明確にし、子どもが自然と聴き合う活動に入っていくような課題や発問を準備したり、子どもたちがどこでつまづくかを予測できるようしっかり教材研究したりすることを大切にしていきたい。

また、子どもたちの育成には、3部（教科・人権・生指）がしっかりと連携を取って進めていくことが不可欠である。誰もが安心して学ぶことができるよう、互いの考えを受け入れることのできる仲間集団を育て、「しんどい子」たちも「わからない」と安心して言える学級、学校の中で研修を積み上げていきたい。

Ⅲ めざす子どもの姿

- ・基本的な学習習慣や、基礎的事項が定着している子
- ・自ら課題に取り組み、考えることを楽しむ子
- ・ペアやグループで聴き合う活動を通し、考えを広げ深められる子
- ・「まちがい」や「わからない」を大切にし、仲間と共に高めようとする子

Ⅳ 研究の内容及び具体的な方策 ～「わからなさ」「まちがい」は宝物～

1. 子どもの学びを深めるために

《全教科・全領域で》

①「聴き合う」ことを大切にした授業づくり

対話する関係とは「聴き合う」関係であると捉え、「聴くことができる子ども」を育てることに重点をおいていく。

「聴き合い」を生むための3つのポイント

1. 友だちの考えや思いを「聴き合う」ことは楽しいと実感させる
2. 子どもたちが、互いの考えや思いを聴き合いたくなるような問いを考える
3. 「わからない」「どうしてそう考えたの？」などと言える関係をつくる

②ペア・グループ活動の充実

授業の中でともに学ぶ展開を作り出すために、ペアやグループで聴き合う時間を意図的に設けていく。そのためにも、「友だちと一緒に考えたい。」「友だちの考えを知り

たい。」という思いを持つことができる場で使っていく。

- ・ペア・グループでの対話の目的を明確にする。
- ・互いの意見を確認するだけのペア・グループではなく、考えを練り上げ、思考を深めることができるような場面を授業に位置づける。
 - ☆子どもたちの中に迷いが生じた時
 - ☆新しい気づきが出た時
 - ☆考えを広げたい（深めたい）時 など

また、ペア・グループ活動での、子どもたちが「聴き合い」が生まれるためのポイントとして、次の点を意識させながら学習を進めていく。

《ペア・グループ活動で「聴き合う」 8つのポイント！》

- ☆聴くを極める（低・中・高）
 - 相手を見ながら、いい姿勢で、うなずきながら、笑顔で、終わりまで
- ☆反応する（低・中・高）
 - 「あいづち名人」の言葉で（低）
 - 「あいづち名人」を参考にしながら（中）
 - 自分の言葉で（高）
- ☆聴きながら心のなかでおしゃべり（中・高）
 - 考えながら聴く
 - 「どこでそう考えたのかな」「自分の考えとどこが同じ（ちがう）かな」
- ☆聴きながら「わからないこと」を発見する（低・中・高）
 - 「それってどういうことかな？」「よく分からないからもう一回教えて」
- ☆聴いたあと、質問する（中・高）
 - 考えを広げる、考えを深める
 - 「もっと知りたいな」「くわしく知りたいな」「〇〇さんはどう思う？」
- ☆聴いたあと、内容を伝える（低・中・高）
 - リボイスすることができる
- ☆話の続きを想像する（高）
 - 相手が伝えたかったこと、相手が困っていることを想像する
 - 相手軸をもった、対話的なコミュニケーション
- ☆仲間の言葉を引き出す（高）
 - 相手に寄り添って聴く
 - 「どこまでわかった？」「どこで困ってる？」「それってこういうことかな」

③思考スキル・思考ツールの活用

考える際の視点を示し、子どもたちがより自分の考えを持てるよう、全教科・領域で思考スキルを活用する。また、思考ツールを活用したワークシートなどを準備することで、考えを可視化し、考えを整理したり、広げたりする力を育てる。

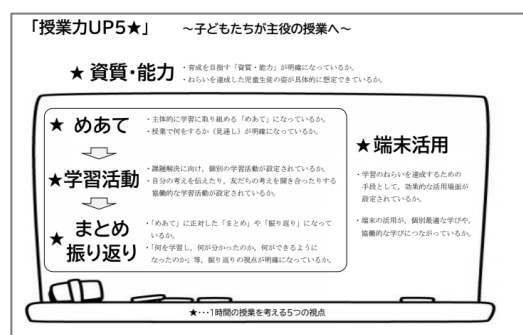
スキル(高学年)	スキル(低学年)	定義
順序づける	ならべる	複数の対象について、ある視点や条件に沿って対象を並び替える。
比較する	くらべる	複数の対象について、ある視点から共通点や相違点を明らかにする。
分類する	なかまにわけ	複数の対象について、ある視点から共通点のあるものの同士をまとめる。
関連づける	つなげる	複数の対象がどのような関係にあるか見つける。ある対象に関係するものを見つけて増やしていく。
多角(面)的に見る	いろいろな見方をする	対象のもつ複数の性質に着目したり、対象の異なる複数の角度から捉えたりする。
理由づける	りゆうをつける	対象の理由や原因、根拠を見つけたり予想したりする。
見通す (結果を予想する)	よそうする	見通しを立てる。 物事の結果を予想する。
具体化する	くわしくする	対象に関する上位概念・規則に当てはまる具体例を挙げたり、対象を構成する下位概念や要素を分けたりする。
抽象化する (一般化する)	まとめる	対象に関する上位概念や法則を挙げたり、複数の対象を一つにまとめたりする。
構造化する		考えを構造的（網構造・層構造など）に整理する。

*考えるための10の技法（思考スキル）とその定義

④「授業力UP 5」を大切にしたい授業づくり

鈴鹿市教育委員会が、授業づくりのスタンダードとして示している「授業力UP 5」を大切にしたい授業づくりをしていく。

- ・つけたい力（資質・能力）を明確に
- ・子どもが学びに向かうためのめあてや課題の工夫
- ・評価基準の設定
- ・グループや全体交流での学びが見える振り返り



⑤教師の指導方法の見直し

- ・挙手させるときの「ハイ」はやめさせる。
(まだ考えている途中の児童が、落ち着いて考えられなくなる。)
- ・声をそろえての「いいです」「ちがいます」を言わせない。
(「まちがい」を大切にする授業にならない。わかるまでの過程を重視する。)
- ・「みんな分かりましたか?」「できた人?」と聞かない。
(「どこが分からない?」「どこまで分かった?」など、わからなさを出発点とする授業にする。)

- ・児童の発言を教師が繰り返し言わない。（リボイスしない）
（教師がしゃべり過ぎると、子どもは聴かなくなる。）

⑥非認知能力の育成

非認知能力の要素 ・やりぬく力 ・自制心 ・自己肯定感 ・社会性

《国語の授業の中で》

①教師の読みを作る

教師も何度も音読し、作品を読み味わうことを大事にしていく。教師用の書き込みシートに教師も書き込みをし、登場人物の心情や人物像を読み描いていく。ある程度書き込みができたなら、学年で作品を読み合い、それぞれの読みを聴き合うことをする。聴き合うことで、自分では気が付かなかった読みに出会ったり、読む中で迷っていたことが明らかになったりと、教師自身の読みを深めていくことにもつながる。多様な読みをしておくことで（あくまでも叙述に即した）、この作品を子どもたちがどう読むかを予め予想することもでき、叙述のどの部分に着目させていくか、どこで音読を入れるといいかなど、授業を計画する際の一つの手がかりとすることも可能となる。

②音読活動の充実

読みを作るためには音読を欠かすことはできない。毎日の家庭学習での音読では、単元目標をもとに、各自がめあてをもって音読できるような、音読カードを用意する。

また、授業の中でも、必要に応じ、音読をする時間を取り入れていく。

- ・前時までの学びを思い起こすために
- ・同じ場面をみんなで読み描くために
- ・新たな読みと出会うために など

③書き込み

「書き込みシート」を用意し、気づいたことや叙述から想像される中心人物の心情や様子、人物像などについて書き込みをさせていく。このあとの聴き合う学習の土台となる活動のため、書き込み例を示すなどして、より具体的に書き込みをしたり、会話文や心内語だけでなく、情景描写や見たものの表し方、暗示的表現などからも書き込みができるよう、丁寧に指導する。

また、書き込みをする際には「書き込みシート」を活用するが、全体像を捉えたり、複数の叙述を結びつけた読みもできるよう、必要に応じ「全文シート」も活用できるように準備しておく。

④ブックトーク・並行読書

⑤日本語教室との連携

日本語教室には、初期日本語指導が必要な子どもから教室での授業支援が中心の子どもが通級している。最終目標は、日本語教室を卒業し、在籍学級の人々と共に学習していくことである。日本語教室での取り出し授業を個別やグループで行い、日本語の力を一人ひとりに合わせてつけていくことで、様々な授業で生き生きと活動に参加できることをめざす。

⑥「聴く力」「話す力」めざす子ども像

学習指導要領に書かれていることをもとに、系統立てためあてを設定し、力をつけていく。また、「聴き方」や「反応の仕方」を教室に明示し、子どもの発言がつながっていくよう指導する。

	低学年	中学年	高学年
聴く力	・話し手を見て、反応しながら、最後までしっかり聞く。	・話し手を見て、反応しながら、最後までしっかり聞く。 ・自分の考えと比べながら聞く。	・話し手を見て、反応しながら、最後までしっかり聞く。 ・自分の考えと比較しながら聞き、考えを広げたり、深めたりする。
話す力	・聞き手を見ながら、最後まではっきりと話す。	・聞き手を見ながら、順序だてて、分かりやすく話す。	・聞き手を意識しながら、理由や根拠を明確にして話す。

《算数の授業の中で》

①問題解決の見通しをもたせ、自力解決の段階に向かう時に対話の充実を図る。

②ペア学習やグループ学習では、仲間の考えを読み取ったり、説明したりする活動を取り入れる。

グループでは教え合うことはせず、答えをひとつにまとめたりするための話し合いもしない。皆で分からない子に寄り添い、分からなさを認め合う。グループの活動が煮詰まってきたり、他のグループの考えが聞きたくなってきたりしたら、全体で聴き合う。グループで解決できなかったことや他のグループで出てきた意見等について聴き合う。出てきた考えと自分の考えにズレが生じてきたり、新たな疑問が出てきたり、もっとグループで話し合いたいという声が出れば、再びグループに戻す。

③ジャンプの課題に取り組む。

④授業の終わりには振り返りをし、自分の学びを確認する。

2. 学力向上のための取組

①学習規律の徹底

年度当初、共通理解・共通認識で、全授業で指導を徹底する。子どもたちが（教師も）常に意識し、習慣化していくことができるよう、スプレッドシートで定期的にセルフチェックをしていく。

②全国学力・学習状況調査及びみえスタディチェックの採点・分析と授業改善

全教員で採点・分析し、本校児童の実態を捉え、授業改善の方向性を明らかにする。学年間を横断した指導の一貫性を図る。また、学vivaプリントも活用していく。

③家庭学習の習慣化

- ・家庭学習の手引きの配布
- ・家庭学習カレンダーの取組（学期に1回）

④放課後スクール

授業で課題の残った児童を対象に、月曜日や金曜日の6限目に学習内容の定着をめざして行う。希望があれば、誰でも残って学習していくことができる場とする。（年間8回）

⑤ICT機器の活用

全クラス（1年生は時期をみて）、毎日登校後にログインし、持ち帰りでの活用も推進していく。学び合いのツールとしてのICT機器の効果的な利用方法を研究する。

- ・ミライシード、オクリンクなどの効果的な活用

⑥読書活動の充実

- ・朝読、昼読の取組
- ・図書館便りの発行
- ・並行読書のすすめ（教室前廊下に「この本読んでみよう（など）」のコーナーの設置）

3. 研修の充実

①全体研修会（授業提案）の持ち方

研究授業は、学期に1回行い、提案クラスのグループ活動は録画し、子どもの学びが、どこで生まれ、どこで滞ったかを後で検証できるようにする。参観時は参観シートを活用し、その授業についてだけでなく、研修での学びを自分の課題と照らし合わせ、今後の授業改善に生かしていけるようにする。

②学びの掲示板

子どもたちに向けて授業の学びを発信する。各学年に割り当てられた掲示板に、その授業で用いた書きこみシートや音読カード、思考ツール、聴き合っている場面の写真などを掲示する。



③授業参観ウィーク

他の学級の授業を参観する週を設ける。他の学年・学級の授業を参観し、写真や動画など記録に残す。参観したことを教科部や学年で交流し、実践に生かしていく。また、自主公開も進んで行っていく。

④放課後ミニ研修会

放課後の時間に様々な教科でミニ研修会を行う。ICTを活用した授業やグループ学習の持ち方など実践した内容を交流する場を設ける。また、ミニ研修会の中で疑問や悩みを出し合い、様々な実践から学び、授業改善につなげる。

4. 学びを支える基盤（人権部・生指部との連携）

月に1～2度、3部の長の会を開き、児童の姿の交流や、取組の確認を行う。

V 研修日程

1 学期	4 月 9 日	全体研修会①	本年度の研修の方向性の確認
	6 月	全体研修会	国語（1 年生）
		全体研修会	教科・学年未定
2 学期		全体研修会	教科・学年未定
3 学期		全体研修会	教科・学年未定
	3 月	全体研修会	研修のまとめ

* 提案授業は、全体研修 6 本（うち国語・算数 3 本、人権総合 3 本）とする。

* 年間を通し、積極的に授業を公開していく。（互いに見合い研修を積んでいく。）